

終わりになき道

NPO法人「保育サービスぽてと」代表 池本泰子

1. はじめに

日本の人口が減っています。出生数が減っていることは、政治や経済的な面だけでなく、あらゆる面から今後の日本の将来を懸念する材料です。また環境が悪い、資源がなくなりそうなどと、生きていくには厳しい状況が見えている中、正直、今の若い人たちは喜んで次代の子どもたちを生み、育てていっていいものだろうかと迷っているに違いありません。自分の勝手に産んでなまじ苦勞はさせられない、ましてや子育てにはお金がかかるらしい…。

では、他人が苦勞して育てた次代の人々に自分たちが壊した環境の整備を任せ、自分たちの老いの面倒をみさせ、しかし文句は言い…ということなのでしょう。

自分たちの育ってきた今までを振り返ってみましょう。ひとりで生きてきたわけではないはず。母から生まれ、多くの人に出会い、支えられて今こうして日本に生きているのです。自分ひとりでないならば、環境の劣悪を論じる前に自分が人に何をしとあげられるかを、まず考えて行動すべきでしょう。それが命の持つ意義ではないでしょうか。この行動は、自分というものを意識している間はずっとできます。そう、年齢を重ねても…

2. 保育サービスぽてとを作った

「保育サービスぽてと」は、東京都の練馬区育児支援あい事業の援助会員で保育サービス講習会を修了したメンバーにより、1999年12月1日に結成された、育児を支援する非営利団体です。若いママやパパたちの子育てを地域で支えるための集まりで、練馬区を中心に活動の輪を広げ、2003年4月に東京都からNPOの認証をいただきました。

「保育サービスぽてと」は、昨今の多様化する家族関係の有様や、子供たちの生活環境の厳しさ、幼児を抱える母親の悲鳴とも聞こえる声に、私たちにできることは何だろうという話し合いの中から生まれました。

当初は、練馬区育児支援あい事業の援助会員のかたわら、練馬区の事業では援助しきれない状況の子どもたち、でも援助は必要である子ども

たちのケアをすることで、もう一つの受け皿になることを目的としていました。要望は千差万別ですが、日頃の活動を通して母親の声を直接聞き、「私たちはどういう形で育児支援ができるのだろうか」とみんなで思案しながら、現在は以下の保育サービスに至っています。

- ① 保育サービス（ベビーシッター）は、小学6年生までの子どもを利用者宅、または援助者宅でお預りします。食事の提供、宿泊も受け付け、送迎のみもしています。
- ② グループ保育は、PTA、各種団体の会合、講演会、研修時に出張保育をします。幼稚園の謝恩会などで下の兄弟たちの保育も行ないます。
- ③ ほっとステーション（一時預り保育）は2002年より始め、区内の4ヵ所で一時的預りの集団保育を行なっています。子育て中のお母さんに「ここに預けてほっとして」育児をまたがんばってほしいという子育て支援です。

ここ3年はホテルのバイキングレストランのご協力の下、サマーランチ、クリスマスランチを保育付きで開催し、徐々に子ども抜きでゆったりとママたち同士でおしゃべりしながらランチを楽しむ企画も実施し、好評を得ています。

- ④ 産褥^{さんじょく}サービスは、妊娠期（つわりで苦しい時等）、産褥^{さんじょく}期に沐浴を含む簡単な家事サービスを行います。また助産師さんに指導を受けた会員が、産後のお母さんや赤ちゃんのお世話をします。
- ⑤ 学童保育は、「ゆうゆうぽてと」を江古田駅北口・ゆうゆうロード商店街で2004年5月、「あ



つぶるぼと」を北町ハッスル通りに2006年4月に開所しました。「練馬区放課後児童の広場」の助成金をいただき運営する学童保育施設です。

夜は20時まで預かり、夏休みなどの長期学校休業時には朝8時から受け入れています。

⑥ 子育てのひろばは、有名な遊園地豊島園の西に「ありんこぼと」を2006年5月にオープンしました。「練馬区民設子育てのひろば」の助成金をいただき、運営しています。

⑦ LOVEピースclubは、独立行政法人福祉医療機構「長寿、子育て、障害者基金」の助成を得て「ありんこぼと」で開設している事業です。これは、子どもの発達に不安や苦勞を感じているママたちのためのひろばです。2008年4月からの新事業です。

⑧ 保育に関する講演会やイベントの企画もしています。2006年度には3回シリーズで「孫育てじょーず～これから楽しく孫育て～」を実施しました。自分の子育てから長時間が経過したために生じる、近々生まれる孫に対する育て方の不安の解消や、既にいる孫の遊び相手となるために必要な正しいおもちゃの与え方や、体力温存の方法などの知識の習得などを目的とし、多くの祖父母世代が参加してくださいました。

また昨年、本年は地域交流イベントとして「ぼととまつり」を開催し、楽しい遊びの提案と地域で育児を支えていくことの大切さを多くの方々に伝えさせて頂きました。



とまつり」を開催し、楽しい遊びの提案と地域で育児を支えていくことの大切さを多くの方々に伝えさせて頂きました。

3. 子育てママを支えて

私自身がこの子育て支援に関わったのは、1997年11月に練馬区が育児支援あい事業の前段階として募集した、育児支援希望者への講習会を開く案内

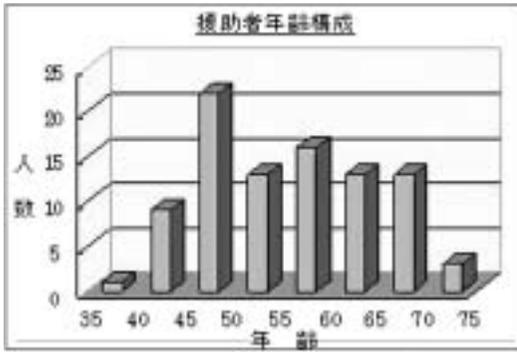
(地域の親子交流のための年一回の「おまつり」
歳だ…なんて言ってもらえません)



を読んだ時からです。

夫は転勤が多く、結婚してからの私は専業主婦、子どもは小学生2人と幼稚園生1人でした。それまでの育児経験を振り返るに、里帰り出産でのんびりさせてもらったことに始まり、以後遠くに引っ越しでも何かと心配してくれる親たちに恵まれ、また大病もしない子どもたちに助けられながら「育自」をしてきました。変わったのは1993年から95年に転勤でアメリカに住むことになり、まったく親の支援が期待できなくなったときからです。それまでも積極的に家族にかかわり、大事にしてくれた夫ではありませんが、なにしろ日本のサラリーマン、なかなか忙しく、プライベートで休んだり、育児のための休暇なんてもってのほか。しかし外国では、慣れない生活と言葉の中でも夫とふたりで頑張るしかありません。そのような中、そこで知ったのは、気軽な「ボランティア」という単語と、小学校の保護者会やオープンスクールに普通に参加する多くの父親、また父親も参加しやすい日時にそういう行事を組み入れる学校でした。子どもの様子を目の前で見る機会を多く得た夫は、積極的に学校に行き、また私も不慣れな英語でも私にできることをしてみようとする積極性が身に着いたのでした。子どもの話で一緒に楽しんだり、悩んだり、盛り上がったたり、また多くの友人ができたり…「子育てって楽しいね」。その気持ちは帰国しても変わりませんでした。自分がもう一度小学生になったような気分で行き交う行事に参加し、ボランティアを楽しみました。

そんな日々を過ごしていた時、世の中には子育てを手伝ってくれる人を求めている人がいるのだ、そして自分の中で人に誇れることは子育て経験だという思いが、まさに区報で前述の募集の記事を読んだときに心に浮かんだのです。



それから9年、NPO法人の認証を受けて5年、仲間は91名になりました。この仲間は「子育て中のママ、パパ、頑張っ!!」ということにみな思いを一つにしています。

これらの仲間の共通点は子どもが好きなおことです。保育士や教員の資格がある者、ない者いろいろですが、愛情あふれるその顔、姿勢にはどの人にも安心してわが子を任せられると感じることができます。ただ、仲間になったきっかけはさまざまです。私のように転勤が多く自分が定職を持てなかった人、専業主婦として子育てになにより頑張っていた人、親や介護の必要な人がいて外で働くことができなかった人、仕事をしていて自分も他人に世話になったので今度は自分が恩返ししたいと思った人、定年になり地域活動をしたい人などです。その中でも特に多いのが、自分の子どもは成人して手を離れたが未婚、あるいは結婚していても孫がいないので子どもの世話を「擬似おばあちゃん」体験をしたい、という人です。

世に言われるような、少子化問題を考えたり年金問題を解決するためなどと、社会的な目的意識を持ってこの仕事を始め、行っているわけではありません。主体は子育てを終えた50歳前後から60歳代の女性たちで、若い夫婦を助けたいと考えて活動しているのです。ただ、それはまったくのボランティアでは続かないものと考えます。取り掛かりはそうでも、時間の有効利用、高年齢でも必要とされ、さらに金銭ももらえることは喜びとともにやりがいや責任感も出てきます。社会に貢献しているという自負心も芽生えます。

4. 子どもたちを取り巻く環境

保育園の待機児解消問題が取りざたされて久しい

ですが、これは永遠に解消できないと思われます。子どもを預けて働きたい、育児からできるだけ開放されたいと考える母親は増えこそすれ減ると思えないからです。学童施設も同じです。母親の理由はさまざまですが、子どもが小学生になったら、社会で働きたい意志がますます強くなるようです。また、もともと仕事を続けながら育児をしているママたちにとっては、子育てに手のかかる時期が、仕事も忙しい年齢です。そういうこともあって、一人っ子が多くなっているようにも思えます。一人っ子が悪いということではなく、親と祖父母が気にして手をかけ、目をかける相手が極端に少なくなっているということです。子どもの親、祖父母は何人いるのでしょうか…大抵5～6人はいるようです。つまり、期待も大きいし、かわいがられるのはよいのですが、どうしても先回りして言葉をかけたり、作業を手伝ったりすることになってしまうようなのです。親、祖父母がいない学校、学童施設では子どもたちがみずから進んで何かをしたり、手伝おうとする姿勢は残念ながら多くは見られません。親は子どもを好きなときにかわいがり、かわいい格好をさせ、思うように扱いたいようですが、子どもたちがその親の気持ちに気づくことによって、社会的な行動ができなくなってしまっているのではないのでしょうか。

仕事で忙しい親には心配をかけたくない、甘えてはいけなく思っている子は多く、親の前では実にしおらしくいい子です。でもやはり心のバランス、ストレスのはけ口はなくてはならないのでしょうか。学童施設の職員に甘えたり、逆に暴力とも思えるほどにたたいたり、ぶつかってきたりします。さまざまな指導に対しても素直に従うことが少ないようです。これは大人に対してだけではありません。言葉による暴力は、クラスメートや同じ学童施設内の仲間にも発せられます。これが「いじめ」につながっていくのではないのでしょうか。マンガ、ゲームによる非日常世界がよく飲み込めていない結果だとも言えるでしょう。恐らく、自分も痛手を受けているのだらうなあ、とかわいそうに思う反面、その心のバランスを保つために、今度は自分が加害者になる構造には悲しいものがあります。

例えば自分の子から被害の様子を聞くと、親はすぐ相手を攻撃にかかります。親の前ではいい子なのですから、その実態をほとんどわかっていないはずですが…。相手の立場を思いやることを忘れ、自分の

子のみ信じるのは、親もまた忙しい現状から、心に余裕をなくしているのかもしれない。

育児というテーマに限らず、情報は街にあふれています。取捨選択する力がないと振り回されることになりかねません。ママたちは社会の中で孤独な子育てを強いられ、頼りのパパは仕事で忙しい。「他人を見たら不審者と思え」と習う子どもたちに、他人は声も掛けられず、見てみぬふりしかできないのでは明日の日本が憂えます。

こんな現状の中、近所のおばさんが子育てに迷っているママたちや、心が不安定な子どもたちに、ひと言でも声をかけられたらいいのではないかと、思います。簡単に他人が声を掛けられない現状ではありますが、これは高校生、いやもっと小さいときから周りを大切にすることを学ぶことによってできるようになるのではないのでしょうか。いじめられる側がいじめる側に回るという悲しい連鎖ではなく、助けられる側が助ける側に回るという「お互い様」の世界です。教育はすぐに結果が出るものではありません。5年、10年経って初めてわかることが多いのではないのでしょうか。目先のことでキーキーしてしまうのではないのです。じっくり構える姿勢が大切です。

5. 私たちの役割

私たちがよその子どもたちにかかわるとき、それは育児ではなく、保育です。ママが子の世話や教育にかかわるとき、又はかかわれないとき、その支援をしてあげるので。ではその「支援」とはどういうことでしょうか。ひと言で言えば「母親の負担の軽減」です。少子化の原因のひとつに出産年齢が高くなったことが言われていますが、これに伴い祖父母世代も高齢化しています。また寿命が延びたことにより、さらにその上の世代の介護で祖父母は孫の世話ができないという現状もあるようです。知識や情報が豊富でも、都会の中で親戚の支援もなく子どもと向き合っていくことはどんなにか心細いことなのでしょう。なにせ初めての経験が続くのですから。このようなとき、身近に頼れる人がいる、という安心感は心強いことです。たとえ頼まなくても切り札を持っていることで、日常を無事に余裕を持って過ごせるでしょう。その切り札になり得るのが「地域の祖父母世代」なのです。団塊の世代が会社を卒業される昨今、何をしたいか、どう地域に戻ればい

いかかわらないかたも大勢いることでしょうか、子育て支援はまさに異世代交流の場として大変貴重な地域活動の場になりうるのです。



しかしながら、ママにとって、身近な子育て支援の実践者としては、パパに勝るものはないことを忘れてはいけません。それは、オムツを替えることとか、ミルクを飲ませることとかではないのです。毎日、ママの子育ての話、日中の話を聞いてあげることなのです。疲れて帰るパパも大変でしょうが、「いっしょに」子育てするということがこそが、社会にとって最も大切な仕事なのです。心の共有、育児に対する理解ですね。

6. 終わりに

家庭科が男女共修になってずいぶん経ちます。女子だけが勉強していた時代がうそのようです。私も結婚前、非常勤講師として高校の教壇に立ったことがあります。定時制高校のしかも分校という特殊な環境でしたので、生徒も少なく、私の未熟さも合わせて今考えると冷や汗が出るような授業でした。生徒達が喜ぶ授業をと思い、調理や食育に時間を多く取りました。今、もしもう一度機会が与えられたなら、私は「生きる」ため、世のため、人のため、そして皆の未来のための「子どもを育てる」という教育に時間をかけるでしょう。

子育ては何歳になっても、またたとえ自分の子どもでなくても関わっていける、というよりも関わるべき終わりのない世界です。何が正しいのか、結果は時間が経ってから出てきます。一步一步丁寧に、でも楽しみながら、次世代を託せる子どもたちが健全に育つよう、何歳になってもママたちを応援することこそが祖父母世代の歩む道なのではないのでしょうか。「子どもを育てる」、それは「終わりなき道」なのです。